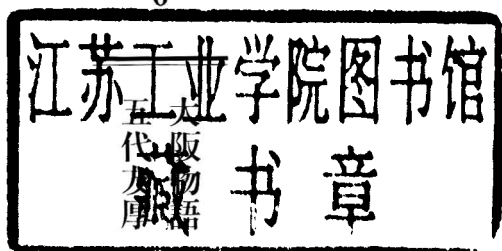


直木三十五全集

6

直木三十五全集

6



示人社

直木三十五全集第6巻

平成三年七月六日発行

編纂協力 直木三十五全集刊行会

発行者 宗 野 信 彦

発行所 東京都文京区水道一―九―一
株式会社 示 人 社

郵便番号 一―二―

電話 東京三八二二―二四一三

印刷 モリモト印刷株式会社

製本 装幀 イワサキ・ミツル

落丁・乱丁本はお取替致します

本文及び口絵写真は改造社版直木三十五全集
第6巻（昭和9年7月4日発行）を用いた。

第六卷 目次

大阪物語

——浪花から大阪へ——

その前に

難波といふ名稱

泥海の街

高麗橋の女敵討

天満橋

高津より石山へ

大阪城

舊居附近

東横堀の東

二

三

五

六

三

六

五

三

四

玉造

二四八

清堀

二五七

平野より天王寺へ

二六七

上町の墓

二九二

鶴橋附近

三六六

城東附近

三七九

今福より毛馬へ

三八四

江口の昔

三八八

石井兄弟

三九五

年を送る

四〇一

五代友厚

——大阪物語續篇——

序（一—七）

四〇六

その幼年時代
その青年時代
官界時代
大阪時代
終りに

四二五
四三四
四八二
三二
五五〇

大 阪 物 語

—浪花から大阪へ—

その前に

どうも、人間といふものは、自分の愛人の事を知らうとする程、熱心に、自分の市、町に就て、知らうとはしない。

「お前、いくつだい」

とか

「亭主はあるかい」

とか、相當、熱心に、且執拗に聞くものであるが、自分の住んでゐる町内の故事に對しては、決して、女を口説く程、熱心にはならない。

私の如き、君子から見ると、女はすぐ、飽きるし、かういふ故事は、調べれば、調べる程、興味の出てくるものであるが、どうも、君子は少いので、あかん。

「そんな暇が、あるかいな」

と、云はれるかも知れんが、私にだつて、暇は無い。だが、カッフェへ行つて、女に、非君子的口説をしながら、一寸、本を扱いて

「大阪の阪は、阪が本當か、坂が本當か」

といふやうなことを、すぐ、研究してみる癖がある。だからと云つて、この稿を、カッフェで書いてゐるのでは無い（私は、そんな氣遣ひな事、決してしない）かういふ風に、時間を利用して、私の故郷の爲に、大阪の史的事實を書いてみようと思ふのである。多分、大阪の人々は、金儲けに、忙しいから、こんな事を調べる暇が無いであらうが、他人の調べた物へは、讀む興味をもつだけの事はあつてもいいとおもふ。それは大阪を女とでも散歩した時話が無くなつたら

「こゝは昔——」

と話のつなぎができるし

「こゝで心中があつた、君はどや」

と死ぬ事も、できるからである。

だが、二千年の前からを、物語る事は、容易で無いし、興味も少いから、史上に「大阪」といふ名稱の現れた時、即ち、石山本願寺の建築された前後から、土地を、人物を事件を、語つて行かうとおもふ。

この企ては、東京に於て起され矢田挿雲氏が「江戸より

東京へ」と題して、その大半を書いてをられるが、その同じ手法を追ふのも、何んだから、私は、私風に、もつと、手廣く、書いて行きたいと思つてゐる。單に考證とか、故事の話とか、舊蹟の物語とかだけではなく、現在の、種々相と結びつけて、古い話であると共に、今の吾々にも、必要なものとして、書いて行かうと、考へてゐる。

然し、石山以前を、全く、除去するのも、いけないらしいから、それは、説明風に、簡単に書いて、それを「大阪以前」として、本文へ入る前に、順序として、書いておかうとおもふ。

たゞ、私は、學者でも無いし、専門家でも無いのだから、いろいろ教へて頂かなくてはならぬ事が起きるとおもふが、それは仕方が無い。相當に、多忙な中を毎月、五日づゝ定期に、大阪へ來て、調べながら書かうといふのだから、助力して下さる方があれば、いつでもして頂く。

この物語によつて、いくらかでも、自分の住んでゐる町内、その近くの寺、神社、道側の石ころ、一本の柱にでも、親みを感じて頂けば、結構なのである。私の郷土の爲に、私の爲しうる最初の仕事として、これ位から始めるのは、

いゝ事だと信じてゐる。

難波といふ名稱

古い頃に「浪速」又は「浪華」と、この地を稱してゐたといふこと位は、いくら、歴史では、金が儲からん（本當は、儲かるのだが——歐洲大戦の時、ロイド・ジョーヂは、フランス革命史を、一部屋で、讀んで、訪客を謝絶してゐた。丁度、ドイツに、革命の起りかけてゐた時である。祕書が、重大事件の報告にきて、革命史など古臭い物を、といふと、ジョーヂ眼鏡の中から、おろつと見て、これをよんで、判らん奴は歴史本の讀み方を知らん奴だ、と云つた話がある。だから、經濟だつて、判るにちがひ無い」と、信じてゐる大阪人でも、知つてゐるであらう。

この「なみはや」なみはな」が、訛つて「難波」となり、その津の端にあるから「難波津」ともなり、或は「難波里」ともなつたのである。「日本書紀」に「皇師、遂に東し、舳舻相接し方に難波碇に到る。偶々、

奔潮太だ急なるものあり、因つて名を浪速國となし、亦曰く浪華國、今、難波と訛して謂ふ」

とあるが、浪速と稱してゐた頃は遙の昔で、難波が古くからの名であつたらしい。

「難波碕」といふのは、今の大阪城の邊の高丘で、當時は、淀川が、この邊で、海と一つになり、浪を速めてゐたものであらう。そして、難波も、今の大阪市では、勿論無く、攝津國でもなく、今の東成、西成兩區位を指して、難波と稱してゐたものらしい。だから西成、東成の舊名を、難波小郡、難波大郡といふが、それが、難波の名残りである。

この「難波碕」から、神武天皇は、舟を進め給うて「河内國、草香邑、青雲白肩之津」へ、御上陸になるのだが、今の生駒山下のある所は、淀川と、大和川との水が海水を引込んでゐて、舟が着いたのである。

古い京からの街道は、飯盛山の下から、野田へ出てくるのであるが、今の淀川沿ひの道などは、天正年間以後の事で、この邊は一面に、水浸りになつてゐたと考へていふ。

この地形の事に關しては、後に詳しく説くつもりであるが「難波津」の名が、史上に見えた事については、大阪人

が、十分に、憶つて置たい事がある。それは「古事記」の、應神天皇の條に出てゐるのであるが、その出てゐる事件が仲々愉快なものである。即ち、天皇が日向國の美人「髮長比賣」の美しさを聞かれて、日向から、お召寄せになり、その女の到着したのが、この大阪である。曰く

「其太子、太雀命、其嬪子を見んと、難波津に泊る」と、「古事記」に出てくる。エロサービスで、東京を壓倒する大阪女の事は二千年前に、その片鱗を、見せてゐると少し、附會でも大して、大阪の不名誉でもあるまい。

この女を迎へに行つた使者が、三月に大阪を立つて、女が九月に大阪へ着いてゐるから、當時の旅の不便さが判る、どんなに支度が長くても、さうかゝるものでは無いのだから、船路の旅にかゝつたのであらう。この事は「日本書紀」に出てゐる。

それから難波津の記事は、度々出てくるが、允恭天皇が、お崩れになつた時、朝鮮から八十艘の舟にのつた調貢と、甲人とがきて

「對馬泊大いに哭。筑紫に到り方々哭、難波津に泊して」と泊り泊りで、哭きながらきたのが、珍しい。今でも、

お葬ひには泣くらしいが、ずる分、昔からの風俗であつたと見える。

泥海の街

島の内といふ名稱が、島の内部、島に抱かれてゐる所、といふ意味のある事はすぐ判るであらうし、船場が、船着場といふやうな事もすぐ想像される。實際、さうした場所であつたから、この名が残つてゐるのである。「日本書紀」仁徳十一年に

「朕この國を見るに、郊澤曠遠にして、田圃少乏、且、河水横逝して流末駛せず。いさゝか、霖雨に逢へば、海潮逆上して、巷里舟に乗る」

とにかく、神武天皇の時代に、生駒山の下まで、舟が行つたのだから、そのうち、水がいくらかは、減じたであらうが「郊澤曠遠」で大和川、淀川が、いつも、水を溢亂させて、大阪の東部は、芦の茂つた沼地が多かつたにちがひ無い。そして、西部はすぐ、荒浪が押寄せて、里の中まで、

船を打込んで行つたりしたのであらう。

當時の大和川は、今の^{大和川}とちがつて、淀川の下流、大阪城の背後の邊へ、河口がきてゐたものであるが、この川と、淀川とを整理されたのが、仁徳天皇である。

即ち、天皇の十一年十月、今の大阪城の東北の邊へ、堀割を工事して、大和川の水を海へ注ぐやうにされた。堀江の名は、こゝを指したものである。この工事ができてから、大和川の水の、河内の低地へ淀んでゐたのが、十分にはけるやうになつて、河内に良田が得られる事になつたのである。

そして淀川が、溢れて來ないやうに、堤を築かれたのが、茨田堤で、今の古川などは當時の淀川の支流であるらしい。

然し、それでも、完全にはならなかつたし、それが、完全になれば、現在の如く、河内に良田の出來る事が判つてゐたから、桓武天皇の、延暦四年に、淀川の水を分けて、今の神崎川といふのへ、流す事にした。

それから、和氣清麻呂が河内川の水を、天王寺の南から海へ落とす事を考へ、淀川の水を三國川へ落とさうとした

が、これはうまく行か無かつた。

そして、寶永元年、今の太和川が、新らしく掘られて、河内へ流れ込んでゐた水が、南を走るに及んで、河内は完全に、新田を得たのであつた。今の若江、小阪の邊から、大阪へかけてなどは、寶永年間まで、河内であつた新らしい土地である。

それから、海の方は、淀川の川口から、押流す土砂が、次第に積堆して、島の内、船場といふやうな所の西部にも、人の住める土地ができてきたらしい。

だが、水害が甚だしく「難波浦海溢、死者數百人」とか「難波浦及び尼ヶ崎大潮、死亡千餘人」が後奈良天皇時代までの文書によく見える。

そのうちに、市街が、發達してきて、防水建造をしたり、秀吉の東横堀の開堀や、徳川氏のそのつづきの開鑿などの事もあり、津波も少くなつて、大阪の水害といへば、淀川のみになつてしまつた。

淀川の水害の甚だしかつたのは私の記憶にさへある。大正六、七年の秋の出水の如き、三島、西成兩郡が河面より水面が高いといふやうな水の浸りやうをした。

河村瑞軒などが、宇治川を開いて、可成り盡力したが、水源地の山々に、手をかけなかつたから、殆ど効が無かつた。そして大阪道修町の吉田屋藤七が、この水源地の土砂の流出するのを止めるやうにと獻言したが、この人の名は、殆ど知られてゐないで、瑞軒のみ治水者になつてゐる。藤七の云ふ手段は、植林の外はないのだから、容易では無いが、眞理である。

高麗橋の女敵討

—

「もし——もし——」

女房が、亭主を揺り起した。

「うむ——」

「えらい、喧嘩や」

「暑い晩やな」

「橋の上で、えらい喧嘩してはりますつせ」

「喧嘩やない——斬合や」

「阿呆らしい、斬合も、喧嘩だんがな」

亭主は、禪一つで起き上つて、川沿ひの障子を開けてみた。十七日の月に外は——川の上も、橋の上も、青紫色に、煙つてゐた。

「見てみい斬合や」

橋の上には、二つの人影が、お互に、刃を月明りに閃してゐた。呼び聲と、女の泣聲と、叫ぶ聲と、それから、足音とが、入り亂れてゐた。

隣の雨戸が——向う河岸の家の戸が、川沿ひの旅宿の障子が、つぎ／＼にあいて、人影が、竝んだ。往來口も、物音が起つた。戸を開ける音、走る足音——。

橋詰には、提灯が一つづゝ動いてゐて、橋たもとへ走つてきた人々を、食ひ止めてゐるらしく、深夜の街のけたゝましい足音が、皆そこで静かになつてしまつた。

「何んやろ」

「あの提灯は、役人らしいで」

「見に行つてこませ」

「まちがうて斬られたら、どないしなはんね。阿呆らしい」「近よらなんだら、えゝや、ないか」

「そんなら、此處から見てたかて一緒やおまへんか」

船の中の人々も起き出して、橋の上を眺めてゐた。

「仇討や」

と、呼びつ、往來を走つて戻つてくる人があつた。

「敵討や、敵討や」

往來では、口々に、人々が叫んでゐた。

「それで、役人が番してけつかんねな」

兩岸の人々は、仇討と聞いて、子供まで起き出してきて、

手擦りにつかまりつゝ、首を延して高麗橋の橋の上を眺めた。

た。

白刃を交へてゐる二人は、進んだり、退いたりしてゐた。

三四人の人影に、手を押へられてゐる一人は女らしく、時

時、泣きながら何か叫んでゐた。

「あの女は、何んやろ」

「きまつてゐるがな、片ツ方の鳴や」

「そしたら、押へる奴は？」

「敵の方や」

「無茶しよる。可哀さうに」

氣合が、幾度もかゝつた。そして、お互に、斬られたら

しく、二人ともよろめいたり——その内に一人が、橋へもたれたまゝ、たゞ防ぐだけになつてしまつた。そして、女性の泣聲が、狂人のやうに、高くなつた。橋に凭れてゐた男がよろめいて、膝を突いた。

「やられた」

と、見物が叫んで、掌を握りしめた時、對手の男が、何か云ふと、人々の手から離れた女が、走らうとした。刃が閃いて、女がよろめいた。

「あゝつ」

見物の女は、自分が斬られたやう叫んで、眼をかくし

た。斬られた二人の男女の所へ、人影が集まつた。橋づめの役人の提灯が、橋の上へ、動いてきた。

「妙やな。女と二人斬られたで」

人々は、呟いて

「どつちが、敵なんやろ」

と、隣の人と、考へ合つた。

「敵の方が敵で、敵でない方が、討手や」

と、隣の人が、答へた。

二

近松門左衛門は、好んで刷らせた朱色の罫を引いた半紙に「母は三十七の酉、父様は、一廻り上の酉で四十九、これ十二ちがうても、美事母が身達のやうな子を持つた權三様は一巡り下の酉で二十五、そなたは酉で十三、十二違ひはよい似合頃」

と、書いてゐた。細い罫には、もう白髪が混つてゐて、六十五歳にしては血色がよかつたが、筆を持つと根氣が、いくらか續かなくなつてゐた。小さい——だが、茂つた木、苔づいた石、深い茂みのある庭へ水を打つて、縁側に葱を吊るしたり、盆栽の鉢を並べたりして、それを時々見ながら、一昨夜高麗橋の上で起つた女敵討のことを淨瑠璃に作つてゐた。

「ほんに四人、酉の年、これも不思議、榮耀云はずと殿御に持ちや、其方が嫌なら、母が男に持つぞや。ほんに、市之進殿といふ男、持たねば、人手に渡す權三様ぢやないわいの」

門左衛門は、冷した番茶を飲み、團扇を使つてから

（そこで——）

と、考へた。

（自分の好きな權三へ、自分の娘をやらうとする。所が、何かしら、妬けるやうな氣が起る。權三が、茶の祕傳を學びにくる。二人で、數寄屋へ入つて話してゐる内に、むらむらと、情氣が起き、權三の帯に、娘と、權三との紋を縫つてあるのをみて、解いて投出し、おのれの帯も解いて投出す。所を人に見られる。權三が、その男を殺す、それから二人で、仕方なく、駆落——）

汀左へ汀は、すぐ、筆をとつて

「槍の權三は、伊達者で御座る。油壺から出すやうな男

——」

と、書出した。少し前に、流行つた、

どうでも權三は、濡れ者だ

油壺から出すやうな男

しつとんとろりと見とれる男

磯の小鳥を追つけて

石突つかんで、づんづと

のびしやるく

を、思出したのであつた。槍踊の名人、權三の唄で、評判の男であつたから、その名も、借りてきたのであつた。

「花の枝からこぼれる男、しつとんとろりと見とれる男

——笹野の露と置きまどひ、寝まどひ、歩みまどひては、

——我と、そもじは五つと七つ、十二ちがひの月更けて、

姉とも云はゞ岩枕、交す枕が思はくも、影恥しき野邊の

草、其方は人の女郎花、俺が口から女房とは、身の恥楓

いたづらに、染めぬ浮名の村萩の——露の笹原、やつと

んとん、磯の千鳥をぼつかけて、石突擲んでずんずと伸

ばしやる、さあえいさつさ、えいさえいさえい、笹葉の

握る槍先に、外す小鳥も無かりしに、今は羽鳥も恐ろし

く——」

こゝまで書いた時、竹本座の人がきて

「先生、北の芝居でも、やるさうで御座いますが、外題は、

女敵高麗茶碗と。申しまして——」

と云つた。

「わしも、外題を變へた」

「何う？」

「好色橋辨慶の、辨慶が、少しいかついから、槍の權三重

帷子——間男だから、重なるを利かし、あの二人、帷子をきて殺されてゐたといふから——」

「いゝ男で御座いましたそうなが槍の權三とは、權三も、あの世でいゝ先生の手にかゝつたと、喜んでをりませう」「討たれた男の本名が、池田文次といふから、權三を借りたし、ちよいと權三の唄も、拜借した。老人になると、人間、ずるうなるもんでな」と、近松は、笑つてゐた。

三

この作が「槍の權三重帷子」と題して、竹本座で、上演されたのが、享保二年八月二十二日——高麗橋で、女敵討のあつた時から三十五日目、三十五日を當込んだの上であつた。

それより前、七月の二十一日には、「女尊高麗茶碗」と題して、浮世草紙が、刊行された。それから北の新地の櫻橋、北の芝居では吾妻三八が「浮世は夢の浮橋」と題して、芝居にした。そして、その何れもが、大阪中の評判になると共に西澤一鳳は「亂經三本槍」といふ本を刊行し、別に「雲

州松江の鱸」といふ本も出た。さうして、この珍しい高麗橋の伏討をいよく評判にした。

門左衛門の作の中には「大經師昔曆」所謂「おさん、茂兵衛」と「堀川波の鼓」といふのと、姦通を取扱つたものが三つあるが、この中で「槍の權三」が一番よく稱されてゐる。

主人公の、おさいは、當時の形式的技巧以外に描くすべを知らぬ他の作家に較べると、群を抜いてゐる。濃情な年増女の嫉妬、心理を、よく理解して、自然に描いてゐる。

江戸へ長らく行つてゐる夫、その獨り暮らしの淋しさ、その淋しい所へ、美くしい、そして、自分の好きな權三の出現、その男は自分が夫持ちでなければ、勝手に渡すまいとまで考へてゐる若衆。おさいは、だが道ならぬ事と諦めて、せめても、自分の娘の嫁にしよう——この女の心理は、よくある事である。

姉が、自分の戀人を妹に興へて、好まぬ夫をもつたり——そしておさいは、その權三に茶道の秘傳を許す爲、深夜、數寄屋の中で、二人切で逢ふのであるが、年増女の愛慾は制し切れなくなると同時に、この醜さを押へようとす

る苦悶で、ヒステリカルに——權三が他に女があると感じると共に、狂的になつて、とう／＼權三の帯を解いて、庭へ投出す。

この邊からは、型の如く、やゝ不自然に、技巧のみ、道具立てのみになつてくるが、全體として、この二人の姦夫姦婦に、同情してかいてゐるのは、門左衛門のうまさであると共に、當時の女達には、自分が、舞臺の上で、解放されたやうに感じて、大いに、二人に、同情したものにちがひ無い。

姦通したものは、日本橋の橋詰へ、さらし者になどしたが、それでも、あとを斷たなかつたのは、今も、昔も、同じ事である。する方もよくないが、される方もよくない。西洋流に云へば、三十七歳にもなる妻を、獨りで、放り出しておけば、男を作るのが當然である。

外國では、夫が一人で、半年も旅行したなら、當然、女性に侮辱されたものとして、離縁してもいいし、他に男をもつても、許されることになつてゐる。

アメリカへ行つてナイヤガラ瀑布を見物しに行く切符を買ふと二枚づきになつてゐるが、ナイヤガラへ行く程

の人は悉く、男女二人連れだからである。一寸遠いと、きつと二人連れ立つて行くといふ風俗で、どうも、少し、うるさいが、この方が、女房一人を打つちやかしてをくよりも、道德的である。

逆に考へると、アメリカの女は一人で置いておくと、何をすることもしれんといふ心配から、何處へでもつれて歩くのだとも思へるが、どつちにしても、おさいなど、氣の毒な女である。門左衛門だの、今の文士など、どうも、おさいなどには同情して、道德家から叱られるが——そんなに、悪い事かしら？

四

此頃の、常識的新知識とは、ルンペンと、女性に同情するといふ事である。誰かに、化石かと罵られた法官にも、この傾向が中々あつて、近頃、女性の權利を擴張してやうと、男にも貞操を守る義務があるとか、有婦の夫が外に女を作つた場合、矢張り、姦通罪で罰せられるとか——中々、女性に屈服するやうになつてきた。そして新聞も、いゝ法律だと云つてゐるし、女性からは、何の攻撃も出ないし——